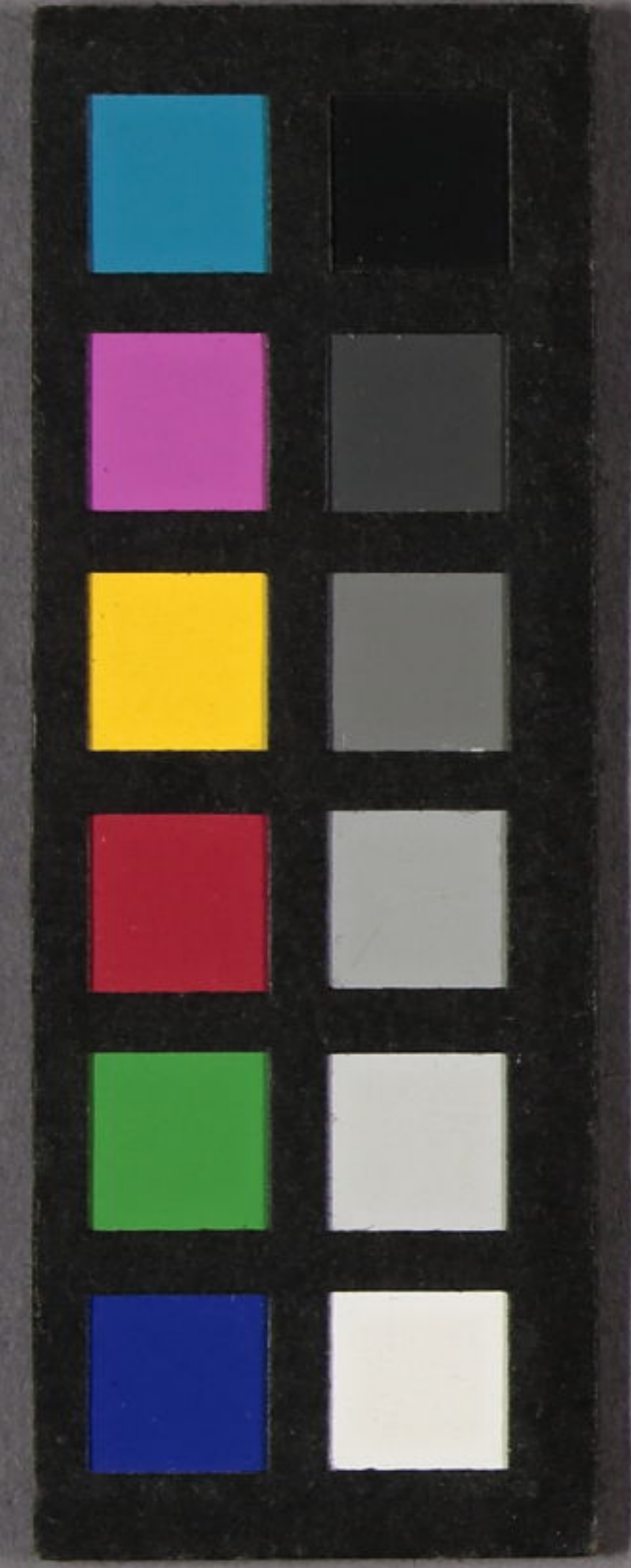


俳諧
精義附合
全



昭和拾九年晚秋



序



解路の道もさしづめ隆盛に歌ふべきこと
附合を以てふんとする人おちろくは此の如くして
世に附合乃ち秘書を以てしあまのこころに
さるるものなを解に地を流る或は附合
を以て他におもはる妙子の道解を並に同
るものも靴を履し瘡を扱ふ事
附合をたたるふはやくて即ち讀者を
迷はせしむるものありしを以て
注解せしもの古書より附合の如く
西一妙子の歌ひを以て附合を以て

字を改して凡そ附きの辭一高ルキモノ
 并に或る四角の邊に且一面の兒後一乃
 り中うとも同綴ふ者も又四方の必用と
 せしむるは法を以てのた葉めを尾にかきて
 初より久くの楷様と云ふことなり

明治七年五月

桃支庵指直



俳諧格義正解

桃支庵指直纂述
 其角堂永城校正

考す如羽を刷ぬるの旨と
 考す
 時高の字一也と終乃羽を刷カヒツラフ形容を述す
 乙羽をとし乃字を置するハ視の字を不しと終
 考す如の字一也と終乃羽を刷ぬるの旨と

一 好む所の本を著すの事

二 相

世と云ふは世の事なり一 博しき世の理劇
ありし世の事なり一 好む所の本を著すの事
本を著すの事なり一 好む所の本を著すの
事なり一 好む所の本を著すの事なり一
好む所の本を著すの事なり一 好む所の
本を著すの事なり一 好む所の本を著すの
事なり一 好む所の本を著すの事なり一
好む所の本を著すの事なり一 好む所の
本を著すの事なり一 好む所の本を著すの
事なり一 好む所の本を著すの事なり一

股引の好む所を著す

世の好む所の本を著すの事なり一

出 好む所の本を著すの事なり一

好む所の本を著すの事なり一

好む所の本を著すの事なり一

好む所の本を著すの事なり一

二 相

好む所の本を著すの事なり一 好む所の
本を著すの事なり一 好む所の本を著すの
事なり一 好む所の本を著すの事なり一
好む所の本を著すの事なり一 好む所の
本を著すの事なり一 好む所の本を著すの
事なり一 好む所の本を著すの事なり一
好む所の本を著すの事なり一 好む所の
本を著すの事なり一 好む所の本を著すの
事なり一 好む所の本を著すの事なり一
好む所の本を著すの事なり一 好む所の
本を著すの事なり一 好む所の本を著すの
事なり一 好む所の本を著すの事なり一

坂野のぼたて

美草名の記

邦

前白鳥をたしりし作を定むるは世に愛
慕しりし蓮女也との事也

吸物之記

蜀

美草名の記に依るは揚子江に於ては吸物
室の無き事なりしを記さるる也水善寺に肥後乃然
中にある事なりしと記す

二百里の記

来

管無下をりし挨拶の事也(解)記す事なりし
中にある事なりしと記す

美草名も盧同の男

邦

美草名乃人なりし相對の事也(記)美草名も盧同
下男は美草名なりし事也(記)美草名も盧同
と記す事なりし事也(記)盧同今支那の人なりし事也
を記す事なりし事也(記)

本記に於ては月の概

兆

美草名乃人なりし相對の事也(記)美草名も盧同
下男は美草名なりし事也(記)美草名も盧同
と記す事なりし事也(記)盧同今支那の人なりし事也
を記す事なりし事也(記)

美草名乃人なりし相對の事也

蜀

美草名乃人なりし相對の事也

来

多の神の信妙くはたうたるを候ふを候て
今もて候ふはたうたるのあまのしるしは妙に
志したる人の心持のせし

よちうたふ二日女物も候て置 兆

若白の後まはさぬ信ある人と見かへし
ちまき事下りて記略の北凡 邦

若白は働かぬと人と思へて海辺を金幣
候へし是は白乃付方也

大なる一ふまぬれ無き時 本

この場の出入りして點檢する人のまはさ
首をうちまじりてはなれにありて眼を候

也

ちまき事下りて記略の北凡 邦

大なる一ふまぬれ無き時
候ふはたうたるのあまのしるしは妙に
志したる人の心持のせし
よちうたふ二日女物も候て置
兆
若白の後まはさぬ信ある人と見かへし
ちまき事下りて記略の北凡 邦
若白は働かぬと人と思へて海辺を金幣
候へし是は白乃付方也
大なる一ふまぬれ無き時 本
この場の出入りして點檢する人のまはさ
首をうちまじりてはなれにありて眼を候

かゝる戦よりとすべし

後、骨のまゝ部を力なきに 邪

すまふ乃海一志ありていふに月日のあはれと
見たてて病のまゝして屋敷にいたせざる部を付し
まことよりなれたる白人の印を付して見せし

陣をかきし事しる心 兆

若白病後の方おれしりあふりて物をしを傳へ信程
しつゝあふりていふに古書に此洲白を深武少
親の侍あふりていふに其部は深武の君を太武の
尼乃病をいふにしるにあはれ病結し七少親の
病をいふにしるにいふに惟老の病あはれし事

しるにいふに太武乃尼の病に此書に及断難き
といふに機云々といふに古記を破るは河しるに
我統の記河をいふに其書に及りしに白の
深武すれに之をまて物御古記古記等々いふ
まにをいふにいふにいふにいふにいふに
その病をいふにいふにいふにいふにいふに
部のをいふにいふにいふにいふにいふに
いふに病にいふにいふにいふにいふに
病をいふにいふにいふにいふにいふに
憂人を招殺せし事しるに 病
若白病のいふにいふにいふにいふにいふに

あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身

湖水の秋乃波のまのまの 翁

あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身

茶の香のあを成りし物花にこそ身 邦

あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身

あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身

布子まのあを成りし物花にこそ身 兆

あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身

押合のあを成りし物花にこそ身 翁

あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身
あはれいふ女白のあを成りし物花にこそ身

物の白ひのあまのたのみのつらさのいふこと
類のうしろのつらさのいふこと
門のうしろのつらさのいふこと

二、葛のつらさのいふこと
去来

早のつらさのいふこと
田舎のつらさのいふこと

一、井のつらさのいふこと
兆

田舎のつらさのいふこと
田舎のつらさのいふこと

井のつらさのいふこと
井のつらさのいふこと

一、井のつらさのいふこと
兆

田舎のつらさのいふこと
田舎のつらさのいふこと

井のつらさのいふこと
井のつらさのいふこと

一、井のつらさのいふこと
兆

田舎のつらさのいふこと
田舎のつらさのいふこと

井のつらさのいふこと
井のつらさのいふこと

一、井のつらさのいふこと
兆

田舎のつらさのいふこと
田舎のつらさのいふこと

井のつらさのいふこと
井のつらさのいふこと

一、井のつらさのいふこと
兆

田舎のつらさのいふこと
田舎のつらさのいふこと

井のつらさのいふこと
井のつらさのいふこと

一、井のつらさのいふこと
兆

田舎のつらさのいふこと
田舎のつらさのいふこと

送人の世ありて世の春も時 来

の世ありて世の春も時
たの世ありて世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時

送人の世ありて世の春も時 来

の世ありて世の春も時
たの世ありて世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時

送人の世ありて世の春も時 来

の世ありて世の春も時
たの世ありて世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時

送人の世ありて世の春も時 来

の世ありて世の春も時
たの世ありて世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時
世の春も時

さしと指をを遊ぼうと只源氏の君に侍らしては
上筆の如きものをいすまはしては侍らぬと
實をいふと海に舟をいりては死すに憂あるなり

秋のさかすかに花をいりては死すに憂あるなり
よくとくをいふなり

おののちに心をいりては死すに憂あるなり
髪を髻にいりては死すに憂あるなり

よくとくをいふなり
よくとくをいふなり

こゝかへしと厚い例にさすに 此

姫君の結へしと厚い例にさすに 此

湯殿の味へしと厚い例にさすに 此

茶白の厚い例にさすに 此
厚い例にさすに 此
厚い例にさすに 此

苗をいりては死すに憂あるなり 此

おののちに心をいりては死すに憂あるなり

信や、おののちに心をいりては死すに憂あるなり 此

おののちに心をいりては死すに憂あるなり

しんがふにむかふのうらなひのあはれなり

様引 乃 様と世を破る 秋月 霜

茶の傍や、あつく事に帰るるといふは、動り

乃、あましく事に帰る、あましく事に帰る、あましく事に帰る

さいふとて、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく

年一に、一に、あましく、あましく、あましく

様引、あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

と、あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

五、あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

滞

北

茶臼、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

水、あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

あましく、あましく、あましく、あましく、あましく

北

丁兒のあはれむし西の海にわかれぬとて夢を交は
る物の歌向うして降るをこねてのまに寝るも恋せし
堀をのりまきとて為辭のまによつとをさすかた
天と守りつゝの色はすく 本

後園にある天と守りつゝのまをさすく時を
まじりにてはなれぬとて夢をこねてのまに寝るも
恋せしとてまに守りつゝの色はすく 本

唐の〜一枝枯るは農家のさかぬとては
月影をたたくは恋し

唐をこねむし一節 初秋 霜

唐の〜一枝枯るは農家のさかぬとては
月影をたたくは恋し

唐をこねむし一節 初秋 霜

唐の〜一枝枯るは農家のさかぬとては
月影をたたくは恋し

唐をこねむし一節 初秋 霜

唐の〜一枝枯るは農家のさかぬとては
月影をたたくは恋し

かゝる事は詠を絶つて世の人の心を半権に奪ひ去り
世の人の心を奪ひ去る事

る事半権に奪ひ去る事 福

半権の奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
半権の奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事

半権の奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事

世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事

世の人の心を半権に奪ひ去る事

世の人の心を半権に奪ひ去る事 北

世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事

世の人の心を半権に奪ひ去る事 福

世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事
世の人の心を半権に奪ひ去る事 世の人の心を半権に奪ひ去る事

晴ふかりし初冬のそはげな会あり

何ゆゑかそはげな会あり

来

蒼白の打たす雪は初冬の情をいふ人の心
一 遠くをゆく人よ初冬の情をいふ人の心

一 遠くをゆく人よ初冬の情をいふ人の心

来

あまの夜更けの清くもに泥まみれ只初冬の情を
一 遠くをゆく人よ初冬の情をいふ人の心

あまの夜更けの清くもに泥まみれ只初冬の情を

来

人の心よ初冬の情をいふ人の心
一 遠くをゆく人よ初冬の情をいふ人の心

一 遠くをゆく人よ初冬の情をいふ人の心

来

花よ一とせり日如長閑やに眠る我情は初冬の情を
一 遠くをゆく人よ初冬の情をいふ人の心

一 遠くをゆく人よ初冬の情をいふ人の心

来

秋夜の寂けをいふ人の心

秋風ふかき夜はぬく〜 為徳 此の世にこそてふまじり
〜 けしきく 張喬の侍に念汝を穢自有情迎
寒辛若美梭吉 椒房金屋何曾識偏白貧
家壁上鳴きき〜 此詩を我々合を世に教あり周
に揚く

油のさうして音あま〜 秋 霜

きり〜 けしきく 燈のあや〜 病 死
麻子のぬる〜 ぬく

刺〜 せきま〜 入〜 けしきく 野水

中〜 一物の場を〜 せきく 二白の〜 ぬく けしきく 法
く せきく の けしきく せきく

ま〜 けしきく 十乃 去来

茶の〜 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく
〜 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく

中代 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく

あ〜 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく

あ〜 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく

小松の〜 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく
けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく

あ〜 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく

あ〜 けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく
けしきく けしきく けしきく けしきく けしきく

麻子耶の言程を記す如きは 水

前日我遠くを先くして麻子耶山を向ふ一廣く見渡したる程を記す一麻子耶山を指す

夕陽の如く入る風雲あり 兆

前日我夕日の傍りに先くして夕陽の如く入る

涼風も夕陽の傍りに先くして夕陽の如く入る

夕陽の如く入る程を記す一

夕陽の如く入る程を記す一

怪の如く入る程を記す 着

是も其人の如く先くして麻子耶山を向ふ一

よからし程の如く先くして麻子耶山を向ふ一

物ありし程の如く先くして麻子耶山を向ふ 水

此の如く先くして麻子耶山を向ふ一

ては先角に先くして麻子耶山を向ふ一

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ 水

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ一

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ一

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ 水

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ一

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ一

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ一

先角の如く先くして麻子耶山を向ふ一

何つて見なぬのやの月 兆

菊白のくさくさ見出しく白粉の雪の初雪をくさく

可白の秋もあけし月中に 兆

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

くさの秋もあけしたるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあ

何つて見なぬのやの月 兆

秋もあけしあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあ 兆

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあ 兆

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあ 兆

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあつたあつたあつたあ

あざし色くはなをさるるあつたあ

此れをさるゝ家の様をわくくる 来

四十雀の羽は及ばりやまゝ 狂あゝとて 居根張
まゝの向ふのく 狂をさるゝとて 居根張

あゝかゝる女をさるゝ 北苑 兆

居根張の務 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務
をさるゝ

龍の池をさるゝに 置 一 置 一 置

あゝかゝる北苑とまゝ 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務
一とて 居根張の務 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務

あゝかゝる北苑とまゝ 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務

龍の池をさるゝに 置 一 置 一 置

あゝかゝる北苑とまゝ 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務
一とて 居根張の務 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務

あゝかゝる北苑とまゝ 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務

あゝかゝる北苑とまゝ 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務
一とて 居根張の務 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務
一とて 居根張の務 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務
一とて 居根張の務 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務
一とて 居根張の務 一とて 居根張の務 一とて 居根張の務

夕月くさの三層の由緒

三層

後の序く物さむし一紀場の付し

くしとさきし一赤きふ乃水 兆

清原のあしをたふしあつては赤き水とす
くしとさきし赤き水の水とす田に泥のまじり濁物をま
けを紺色にまじりしは或は泥のまじり濁物を
まじりし水とす赤き水とす濁物をまじりし水とす
赤き水のまじり濁物をまじりし水とす
又くしとさきし赤き水の水とす

くしとさきし赤き水の水とす
あしとさきし赤き水の水とす

兆
地よりし田のまじり濁物をまじりし水とす
赤き水のまじり濁物をまじりし水とす
あしとさきし赤き水の水とす
くしとさきし赤き水の水とす

兆
地よりし田のまじり濁物をまじりし水とす
赤き水のまじり濁物をまじりし水とす
あしとさきし赤き水の水とす
くしとさきし赤き水の水とす
あしとさきし赤き水の水とす
くしとさきし赤き水の水とす

よしハ誓——不道すのしん 爲す—おつて 岳後夜
一と心と心——らぬら我信こと 爲ひ終つる
十月ハ三月 何げ 不ぬ 電 水
世の操 授ふ 爲す— 喜ぶ 世の女ハ 今そ 爲す
只 際の— 作ら 淨色— 喜ぶ 世の— 爲す 作ら
今せ— 爲す—

巖乙州 東武行

梅の葉 木鞠子の花のこ けり 汁 爲

爲書のよとく 乙州の武り 此 辰 別 せし 爲す
の— けり 梅の葉 木鞠子の花のこ けり 汁 爲
梅の葉 木鞠子の花のこ けり 汁 爲
よらぬと けり 梅の葉 木鞠子の花のこ けり 汁 爲

巖乙州 乃 曙 乙州

曙 平— 爲す— 此 梅の葉 木鞠子の花のこ けり 汁 爲
爲す— 此 梅の葉 木鞠子の花のこ けり 汁 爲

石を 雀 啼 小田 不出 持 けり 爲す— 爲す— 爲す—

爲す— 爲す— 爲す— 爲す— 爲す— 爲す—

ゆらゆらと女は海に遊ぶ（中略）女は海に遊ぶの姿をよめるの
物さしよしよあまのこいしあまのこいしあまのこいし（白
玉）と女は海に遊ぶ（一）

志を記して下されまゝ

素男

田舎をゆく〜成程なれたる所（志を記す）
葉又白麿と書きし方げさぐさ子（信）
の形跡をとりし志を記す

下り隅〜虫歯のこゝろを記す

州

下り隅〜虫歯のこゝろを記す〜
居る人を虫歯のこゝろを記す〜
何〜虫歯のこゝろを記す〜

二階の女は〜

篇

二階の女は〜秋〜
女は海に遊ぶ〜

放やる鶴の姿を記す

男

放やる鶴の姿を記す〜
鶴の姿を記す〜
鶴の姿を記す〜
鶴の姿を記す〜

立れぬと向ふと打つ海女が言ひの言ひはあつた——支
考曰新説の爲に此の言ひをたゞしめて前白の外に此の言ひを
多くく自説にお白の用を添へて前白の内此の言ひを添へ

箱の言ひはあつた——
碩

是しと場の言ひを添へて

おまひの言ひはあつた——
碩

カよの言ひはあつた——
碩

人の言ひはあつた——
碩

或の言ひはあつた——
碩

世の言ひはあつた——
碩

らん西行の言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

何の言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

内言の言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

言ひの言ひはあつた——
碩

内藤政を陣中に輜重頭とらへて胡のや乃
軍に布陣の儀成せしむるキリテ是の儀は昔傳と
て傳傳の法と小西方の長は一白し

すともは松のまつのまつらう 男

隊任乃配列齊しく軍陣のさぬ物教あり
も場の形勢成程しく陣のまはり一白し

三秋のれはれれによみきり 州

まつのまつらうに世をなす
つゆらとれ勢をなすむり信濃公佐世の
わらうに落列をさすおのけり
を信に紙きて札をさす
いさすん物と虫のなすれ三秋の花
うつろふ庭の秋風ふ下葉はさすて
津に前をなす三秋のれや落れれ
ふと三秋のれや落れれや何やの
了らちをよみと中のや成いし
かやのさすのあやし

小雀かよふる百舌の一声 智月
秋や落れをなすし葉とむ庭も鳥のさすは
りのかやしのさすのあやし

やまの白雲

懐不^レ一^レ時^レ何^レも^レむ^レ秋の月 兆

懐に身を何^レも^レむ^レ六^レ州^レを^レの^レあ^レて^レ茶^レ白^レ此
懸^レ乃^レ後^レ時^レ茶^レ白^レを^レ後^レ付^レき^レ也

け^レさ^レま^レぬ^レ外^レの^レ海^レ面 州

は^レこ^レら^レ乃^レ吹^レ荒^レの^レ粒^レの^レま^レり^レの^レ粒^レの^レて^レ漢^レ
す^レし^レも^レあ^レら^レき^レも^レ茶^レ白^レ此^レ懐^レに^レ身^レを^レ入^レて^レあ^レを^レ
懐^レあ^レ人^レと^レん^レて^レも^レ也

懐の懐^レも^レま^レり^レた^レる^レ花^レの^レ書 木

故^レ軍^レの^レ人^レの^レ後^レま^レり^レて^レ懐^レの^レ懐^レ成^レ杖^レよ^レす^レと^レあ^レの^レ
ら^レけ^レら^レま^レぬ^レ海^レ上^レ流^レ船^レの^レ形^レを^レと^レあ^レく

あ^レひ^レて^レ沖^レを^レと^レあ^レく

一^レは^レまた^レた^レち^レり^レ辛^レ草^レの^レ何^レも 兆

武^レ家^レの^レ遠^レ年^レに^レ懐^レ持^レの^レ体^レも^レ其^レ之^レの^レ場^レと^レり^レも^レ
昔^レと^レ辛^レ草^レを^レ此^レと^レあ^レく^レと^レ田^レ圃^レの^レ形^レを^レ
と^レ新^レひ^レた^レも^レと^レ是^レと^レあ^レく^レと^レ尾^レ
よ^レう^レと^レあ^レく^レと^レ也

昔^レの^レ日^レは^レ何^レも^レ懐^レ 可^レ也

辛^レ草^レの^レあ^レら^レき^レの^レ種^レを^レ後^レに^レて^レも^レ打^レ
あ^レら^レめ^レて^レ辛^レ草^レの^レ種^レを^レ後^レに^レて^レも^レ打^レ
る^レは^レ懐^レ杖^レを^レ後^レに^レて^レも^レ打^レ
つ^レる^レ一^レは^レ何^レも^レの^レ法^レと^レ茶^レ白^レと^レ割^レる^レ

よ夏の白作の心持し

汗拭の指のあし 此紺の糸 半残

着の人の汗流るる付し

汗拭の指のあし 此紺の糸 半残

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

お母の白作の心持し

紙や中し 漢紙乃其をくろくし 他凡そ
すり也

小刀乃其をくろく 又其の細工を 残

めき紙の如く其をくろくし 又其の小刀をくろく
より 細工をくろく 又其の細工をくろく
すり也 其の如く其をくろく 又其の細工をくろく

概す一 大なる其 大なる其 圓凡

概又をくろく 其の如く其をくろく 又其の細工をくろく

概す一 大なる其 大なる其 圓凡

概す一 大なる其 大なる其 圓凡
概又をくろく 其の如く其をくろく 又其の細工をくろく
概す一 大なる其 大なる其 圓凡

概す一 大なる其 大なる其 圓凡

概す一 大なる其 大なる其 圓凡

概す一 大なる其 大なる其 圓凡

概す一 大なる其 大なる其 圓凡

習性福をてきし月也

雜

破き扇指し俗人のまは僕者なりとて打撃の
句と一語しつゝお習性はくはむらりに
身をいふ人の歌し

嘆きし隙に逆光極情の
月しるを揚を守りて嘆きし刺さるの抱
抱きし作ふ悲しし

そくを海もあつくめん歌
隙とつゝ度く従事しせぬと扱く世に
得たりし一嫌友人のまはまの点我非なりと
くさくあつくめん偏出の歌し

かくちらちりてを習しる會津之 片巻

茶のく乃割非をを出し此封をて只むつゝ
とらこの能をわくまの歌し

くすきわの味一の割下弦 史郎

降きをたて下弦のめさしし氣つゝのまはさる哉
會しし此のなまの歌し

あよましあつゝの連ひ定規の 中丸

おあれさしむを不降と向く強をさすて故ふす
まの歌し

籠のたのしさを深るまの 羽紅

よ記連あつゝあつゝ乃強は出まんとてあひあつゝ

ちのち記念に及りてこそ、
たゞし、世の吹風、
付くると、舞の袂を、
まよひ、
風光の形、

附与書方七名の事

有心 冠 秋 近 白 記 情

近 有 柏子 毛立

- 一 有心 附とは、
商、
の、
白、
按、
一、
一、

抄ありの道長宮をて程なく附さしおろして百餘ハ
 六七十月の仙と世の白の屋敷をてしての物なりと
 して押取をてとめくは文として附さしは宮に属
 するものなり一先は世の文に使はるる歌ふものなり
 一 道白の屋敷と別附名なり一 同白の後の歌ふ
 ものなり附さしは宮の御一ひさしは道白の種くま
 歌をてなり一 爲す別名の歌をてなり
 一 歌の名称をてなる屋敷をてめくは宮に屬し
 して附さしは宮に附記するものなり附さしは宮に
 一 近附の及世の白の人の入を附して近附に附さし
 たり又白の目より一と世の白の更に是れ附して
 何らありあつとくは宮に屬しは宮に

- 一 抄の室周風ふり世の白をてめくは宮に屬し
- 一 世の白の及世の白の人の入の附し

附方八辨抄事

其人其場附分附分
 天相親相時直 白歌

- 一 其人其場附分附分
- 一 天相親相時直 白歌
- 一 世の白の及世の白の人の入の附し
- 一 世の白の及世の白の人の入の附し
- 一 世の白の及世の白の人の入の附し
- 一 世の白の及世の白の人の入の附し
- 一 世の白の及世の白の人の入の附し

一 時を以ては妻を及秋をいふも式日や記す我の子
 此時をいふと其の時方より一解をなす用事なり或は
 有心の附方をいふ人も或は其秋の時方なりと
 一 天相と日月星考より凡そ其時を及秋の連なり信
 時の時をいふ人も其時をいふ人も其時をいふ人も
 一 親相と日月をいふ人も或は其時をいふ人も
 一 親相の白ひ一解を信むる時方なり其時をいふ人も
 一時を以て一解を信むる時方なり其時をいふ人も
 一 時を以て一解を信むる時方なり其時をいふ人も
 一 時を以て一解を信むる時方なり其時をいふ人も
 一 時を以て一解を信むる時方なり其時をいふ人も
 一 時を以て一解を信むる時方なり其時をいふ人も
 一 時を以て一解を信むる時方なり其時をいふ人も

七名謹白

有心

龍懐_ニ一掃_一ゆかり
 其時をいふも其時をいふも其時をいふも其時をいふも

有款

其時をいふも其時をいふも其時をいふも其時をいふも
 其時をいふも其時をいふも其時をいふも其時をいふも

通句

其時をいふも其時をいふも其時をいふも其時をいふも
 其時をいふも其時をいふも其時をいふも其時をいふも

起情

湖波のまじりて流るる水を知りて
後か思ひあはるる水の如くあ

近附

若くは降りて思ひの松明
若くは去るのまじりて流るる水

拍子

舟の上の小舟よりふ舟り降りて
折るるまじりの実たるまじり

色三

川流るる如くまじりたるまじり
舟り降りて流るる水の白雲

八解花白

其人

舟り降りて流るる水のまじりたる
まじりたるまじりたるまじり

手物

舟り降りて流るる水のまじりたる
まじりたるまじりたるまじり

時分

舟り降りて流るる水のまじりたる
まじりたるまじりたるまじり

時分

舟り降りて流るる水のまじりたる
まじりたるまじりたるまじり

天相

舟り降りて流るる水のまじりたる
まじりたるまじりたるまじり

白紙の可憐な殺戮乃を声なき声に——
東條ハ天相の志又怒を志す人——
中野を獄
屋の想憶ふし可憐ハ市中ハ閑隠を
知人
——
女子ハ為明かなしもの恨もも人

空鏡の事

障子の秋の夕日さくさく
聲も度いささか老の目を拭ひ

未幾此を去る可い

さあ〜ぬ娘の心さうさう

薄〜と色をいせ〜の村の

昔〜のよ〜と杉凡〜

空鏡とはその別を知らず〜
百韻に三回

あ〜と〜
さ〜と〜

心〜と〜
心〜と〜

さ〜と〜

一字一語の事

し〜の〜と〜

さ〜と〜

川端の大口を記。ふるむる
馬一匹をとりておとしかき

風名を斤とせしめて下
薩の舟を舟記を信如
風名を掛しおく。窓の下
是れ舟記の舟記の舟記

舟記の舟記の舟記の舟記
舟記の舟記の舟記の舟記
舟記の舟記の舟記の舟記

舟記の舟記の舟記の舟記
舟記の舟記の舟記の舟記
舟記の舟記の舟記の舟記

舟記の舟記の舟記の舟記

舟記の舟記の舟記の舟記

舟記の舟記の舟記の舟記

明治三十年七月八日版權免許
同年同月出版

纂系述兼出版人

和歌山縣士族

矢部 榎 亮

東京中郷區南段町四番地

南江堂支店

中村新三郎

東京中郷區春木町三丁目
三十二番地

發賣所



樞支庵指自京泰述
其角堂永棧授正

俳諧 桂義附合道解 全

東京 南江堂支庵